〔動物物語〕

かちかち山の話

じっちゃ、今度、お天気のいい日、豆まぐにいったど。したば、「一粒まいたら千粒なあれ」って、ぱっぱと蒔くわけだ。たぬき、そごに大きな根っこあって、そさ腰掛けて、「ひと粒、一粒、なあんもなんな」って言うわけだ。「このやっこぉ」ってぼっていって、そのじっちゃまぁんだ、蒔くわけだ。まぁんだ来て、その根っこさねまって、「一粒まいだって何もなんな」って言うわけだ。困って戻ってきて、ばばどさしゃぁ、「んにゃー、豆蒔きに行ったばしゃ、たぬき来て、一粒まいたら千粒なれってば、なんもなんなって言うってば、こらぁ」って、ばばさしゃべったば、ばばまんだ、「ひゃぁ、今にあめ売り来るために、その根っこさ、飴買って来て、根っこさ塗りたぐれ」って。「せば、たぬき来てねまれば、こんど動けねぐならって」。じっちゃ、飴買って来て塗りたぐって、豆蒔いたわけだ。「一粒蒔けば千粒なあれ」ってばっぱと蒔いたど。まだたぬき来て、「一粒一粒なあんもなんな」ってわけだ。「このちくしょう」と、じっちゃ、ほったば、狸のけっちさ飴ついて、今度動けねわけだぁ。そいで、「わぁい、いがったべぇ」と思ってしゃぁ、じっちゃ、縄持ってギリギリとたぬきとこ結ないで、家さ背負って来たわけだぁ。「ばば、たぬきどご、捕めただでぁ」って。「おー、んだってねぇ。いがったなぁ」って。昔だば、しるしふく札っこ縄吊るしたもんだために、その縄さたぬき、じっちゃまだ吊るしたど。じっちゃまだ、山さ柴伐りに行ったし、ばばまだ、毎日喰う米どご搗ぐわけだ。ばば、搗ったば、そのたぬき、「ばば、おいどご、許してけれじゃぁ」って。「おいまだ、じっちゃ来ば、きめがいる（怒られる）ものぉ」ってば、「じっちゃ来ばひゃぁ、またこさ吊るさいるんてがに、さっとこ、降ろしてけれ」って。なんぼがしゃべっても、たぬき言うわけ。そいで、ばば、あきれて、さっと移すがと思ったば、そのたぬきどんと跳ねて降りて、ばばどご、ただいて、殺して、ばばみーんな首根っこだの、体だの、みぃんな切って、ばばに化げて。今度じっちゃあがって来たべしぃ、「ばばぁ、今来たでぃ。たぬきどうしてらば」「たぬきひゃぁ、なんだれぃ。たぬきいだでばぁ」こうしゃべったわけだ。いっつに、たぬき、ばばぁになって、「じっちゃあがれ」ってして。今度あげて、ばばどご、殺して、煮だり、なんだりしてはぁ、ばばに化けてはぁ。じっちゃまだ、たぬきだど思って喰ったべし、まんま喰って、ばばなったたぬき、流しさ、茶碗洗いに行ったべし。したば水屋の窓からドンと跳ねて、「ばんば汁喰って、うめがったべぇ。みんじゃの下の骨見ねがぁ」って言ったわけだ。不思議だなぁと思ってしゃぁ、いだっけ、なぁーんぼか、いま今度しゃべるわけだぁ。じっちゃ泣いたべし。うさぎ来て「じっちゃ、じっちゃなして泣いてばぁ」ってしたば、

「しゃぁー、おいしゃぁー、ばばみんな殺されてこらぁ、ままんーで、骨、縁の下さへで、ばば殺されたでぇぁ。泣ったでぇ」って言ったど。したば、「じっちゃ、じっちゃ、泣ぐなぁ。オレ仇とってけらぁ」って。うさぎ、山さ萱刈りに行ったど。したば、萱刈って、背中さ背負って来たわけだ。たぬきまだ、後ろから来て、マッチでカチッカチッど、火っこ付けるわけだ。うさぎ、「なんだばあれぇ。たぬぎ、かちっかちって鳴るなぁ」「あれひゃぁ、かちかち山って勝風山やごったれぇ」って言うわけだ。うさぎまだ、知らねで行ぐべしぃ。萱さ火つけて、ボウボウと燃えたわけだ。なんだ、うさぎ「ボウボウって言わじなんだば、たぬきぃ」「あれひゃぁ、ボウボウ山ってしゃぁ、ボウボウって山だれぇ」て言ったわけだ。うさぎの背中ままんで火傷になったわけだね。「あいぃ、ヤゲなった」って、うさぎまだ、痛でって、泣ぐわけだぁ。そのたぬき、南蛮の粉、まと練って、痛でとこさ塗ったぐってけらぁたやつ、塗たぐるわけだぁ。あばただったもんだもの、滲もうで、ほれぇ。「わい、痛でで。わい、痛でで」って、毎日痛って居たど。あっ時何だわけだ、木の船と土船とふたっつ作ったわけだ。たぬきさ「どの船さ乗ればぁ」たば、「オレ土船さ乗っちゃぁ」って。土だら丈夫だがと思って。うさぎまだ、木の船さ乗ったわけだぁ。今度二人とも漕ぎ出すわけだ。たぬきのふね、土だものだものねぇ。川の中さ行ったば、ジャブジャブ割れて、たぬき沈んで死んでしまったわけだ。それでとっぴんぱらり、これだった。

野村セツ（檜山・明治38年生・94歳）

〈解説〉

「かちかち山」の話は日本全国に広く分布する最も普遍的な昔話である。爺さんが豆まきをする。豊作を願うと狸がケチをつける。婆さんの知恵で狸を捕らえるが、婆さんをだました狸が、婆さんを殺してしまう。その婆さんの肉であることを知らずに喰った爺さんに、兎が仇を取ってやろうという。狸は兎を殺そうとするが果たせず、逆に兎の計略にかかって沼に沈んでしまう。仇討ち型の話である。ただし、ここの話は萱を背負って火をつけられたのが兎になっている。普通は狸が柴を背負って火をつけられ、火傷薬を付けられ、土舟で沈むことになっている。『伝承文芸』に檜山の梶原キミエさんの「勝々山」が収録されている。そこでは山へ柴刈りに行く場面が抜けている。こうして類型化された昔話も同じ筋立てで一様に伝わっているとは限らず、年数の経過や話者の話しぶりと聞き手の受けとり方によって、さまざまに変形したものとみられる。